立正大学心理学研究所紀要 第11号（2013） 51－61

大学生における「世間」と「社会」の捉え方に関する予備的研究

髙 橋 尚 也（立正大学心理学部）

Primary Study Concerning Awareness of "*Seken*" and "*Society*" in Students

Naoya TAKAHASHI (*Faculty of Psychology, Rissho University*)

Abstract

In Japan, "seken" are used in the meaning like the world, defined by the ring of the relationship between individuals as the middle belt of the relative and others. Meanwhile, "society" is a word that means a wide-ranging interpersonal relationship including the total society from a partial society on the assumption of the Western individualism. The present study examined the difference of how to catch the word such as "seken" and "society". As a result of the questionnaire for 39 students, there was no significant difference in extent where the respondents were conscious of "seken" and "society". However, the number of categories judged to be included at "seken" was more significantly less than that of it included in "society". It was judged that "Parents", "Siblings", "Lover/Person", and "Friend in the club" were categories included in "society" rather than "seken". Moreover, the content freely described as "society" contained a lot of content that meant a place of employment and a social system though it as "seken" contained a lot of content that meant the reference standard. Finally, it was discussed that awareness of "seken" that were the middle belts of the relative and others promotes social network and prosocial behavior.

Key words：seken, society, text mining

キーワード：世間、社会、テキスト・マイニング

問 題

近年、「ジベタリアン」と呼ばれるような、周囲の目を気にせずところ構わず腰をついて座り込む若者について指摘されたり、「便所飯」や「ランチメイト症候群（町沢，2002）」のように、学校や職場で一緒に食事をする相手がいないことに一種の恐怖による行動や心理が注目されたりしている。前者では、「世間」の目、つまり公的自己を意識しない行動として論じられるのに対し、後者では、「世間」や「他人」の目を過剰に意識した行動や対人不安として論じられることが多い。このうち、「ジベタリアン」と呼ばれる現象に対して、菅原（2005）は、「ジベタリアンたちの羞恥心は壊れておらず、彼らの社会的警報装置が無関係なタニンの中で活動を停止しているか、あるいは、従来と異なるセケンの基準に従って動いている」と考察している。このように、現代の大学生に関しては、「世間」を意識していないという指摘と、意識しすぎているという指摘の両方が存在していたり、世間の認識範囲が変化したりしていると論じられているのが現状である。

それでは、「世間」とはこれまでどのように捉えられてきたのであろうか。「世間」とは、広辞苑によれば、「有情の生活する境界や煩悩のある世界（仏教用語）、天地の間、辺り一帯、人の世、人生、社会や世の中、世の中の人々、世間づきあい、交際の範囲、そのための費用、くらし向き、身代、財産」とされている。井上（2007）は、世間を準拠集団と捉え、特に親しい人々「ミウチ」と全く見知らない人々「タニン」でもなく、心理社会的に無関係でもないが、直接強い関係を持たない人々と考察しいている。また、阿部（1995）は「世間」を、「個人個人を結ぶ関係の環であり、会則や定款はないが、個人個人を強固な絆で結びつけている。しかし、個人が自分からすすんで世間をつくるわけでない。何となく、自分の位置がそこにあるものとして生きている。」と定義している（阿部，1995，p.16）。他方、阿部（1995）は、「社会」を「西欧の歴史的背景の中で生み出されたかなり抽象的なものであり、個人を前提とする概念」と述べている。また、中村（2011）

は、辞書的定義や阿部（1995）による世間の捉え方をふまえて、「社会」は個人の意思を超えて、その欲求や感情とは独立に働いている面があると論じ、「世間」はその意向を代弁する「他者」と個人の人々との生々しい心理・社会的交流の中で、個人は「世間」に対して世間体を取り繕ったり、無視したりして、個人としての「私」の主体性を精一杯発揮していると論じている。

中村（2011）は、社会心理学観点から、「世間」の機能について考察を行っている。中村（2011）は「自己」を個人の主体である「私」の代理人、「他者」を「世間」の代弁者と捉え、「私」と「世間」が循環的に交流していると考えている。その上で、「世間」から「私」への働きかけには、評価・抱排・規制があると整理している。また、世間からの働きかけを受けた「私」の心理的対応としては、自尊感情や羞恥心などの自己評価、自己呈示と恐怖感などの自己表出、自己制御などのセルフ・コントロールがあると論じている。さらに、「私」と「世間」の交流には受動的な場合と能動的な場合があるとも考察している。一連の中村が考察したモデルは、「世間」が漠然としたものであり、その意向を個人は「他者」を通して知ろうとすると捉えており、この枠組みから従来の社会心理学のテーマを新たに整理し直した試みといえる。

このように、「世間」については、その概念の意味と機能について、さまざまな評論がなされていたが、近年、中村（2011）によって考察がなされるまで、心理学領域で「世間」について体系的に検討しようとする動きはみられなかった。もし、中村（2011）の試みやモデルに対し、実証的な裏づけが重ねられたとすれば、従来の社会心理学における「自己」「対人」「集団」「文化」などの分類によって研究されてきたそれぞれのトピックが「世間」という概念と機能のもとに体系化される可能性を秘めていると考えられる。しかし、評論や考察においては、「世間」のもつ意味や可能性について論じられてきたものの、実際に現在を生きている青年が「世間」をどのように捉えているのかは明確ではない。そこで、本研究では、「世間心理学」を考える上での基礎資料を収集するために、大学生が「世間」をどのように捉えているのかを探索的に把握し、類似の語と考えられる「社会」と比較することから「世間」の捉えられ方の特徴を記述することを目的とする。

方　法

1　調査方法と調査対象者

2010年夏に首都圏の私立大学に所属する大学生39名（女性37名、男性１名、不明１名）に対して個別記入形式の質問紙調査を実施した。協力依頼は著者が個別に行い、後日個別に回収した。回答者の平均年齢は19.95歳であった。

2　調査内容

⑴ 「世間」という言葉から連想する内容（自由記述）

「あなたは、『世間』という言葉から、どのようなことを思い浮かべますか。どのようなことでも結構ですので具体的に書いて下さい。」と教示し、自由記述形式で回答を求めた。

⑵ 「世間」を意識する程度（１項目・４件法）

「あなたは『世間』をどの程度意識しますか」と尋ね、「１　ほとんど意識しない」、「２　あまり意識しない」、「３　たまに意識する」、「４　とても意識する」の４件法で回答を求めた。

⑶ 「世間」を意識するとき（自由記述）

「あなたが『世間』を意識するときは、どのようなときですか。できるだけ多く挙げて下さい。」と教示し、自由記述形式で回答を求めた。

⑷ 「世間」に含まれる人物カテゴリー

あらかじめ表１に示す26カテゴリーを挙げ、多重回答形式で回答を求めた。

⑸ 「世間」に含まれる人物の職業（18項目・多重回答形式）

Lin et al（2001）のポジション・ジェネレータ尺度を日本語化した池田・小林（2007）を参考に18カテゴリー（表２）を挙げ、多重回答形式で回答を求めた。

⑹ 「社会」という言葉から連想する内容（自由記述）

「あなたは、『社会』という言葉から、どのようなことを思い浮かべますか。どのようなことでも結構ですので具体的に書いて下さい。」と教示し、自由記述形式で回答を求めた。

⑺ 「社会」を意識する程度（１項目・４件法）

「あなたは『社会』をどの程度意識しますか」と尋ね、「１　ほとんど意識しない」、「２　あまり意識しない」、「３　たまに意識する」、「４　とても意識する」の４件法で回答を求めた。

⑻ 「社会」を意識するとき（自由記述）

「あなたが『社会』を意識するときは、どのようなときですか。できるだけ多く挙げて下さい。」と教示し、自由記述形式で回答を求めた。

⑼ 「社会」に含まれる人物カテゴリー（26項目・多重回答形式）

あらかじめ表１に示す26カテゴリーを挙げ、多重回答形式で回答を求めた。

⑽ 「社会」に含まれる人物の職業（18項目・多重回答形式）

「世間」に含まれる人物の職業と同様のカテゴリーを用い、多重回答形式で回答を求めた。

結　果

1　「世間」と「社会」を意識する程度

回答者の「世間」を意識する程度は、「1．ほとんど意識しない」が0.0％、「2．あまり意識しない」が12.8％、「3．たまに意識する」が71.8％、「4．とても意識する」が15.4％で、平均は3.03（*SD*0.54）であった。また、回答者の社会を意識する程度は、「1．ほとんど意識しない」が0.0％、「2．あまり意識しない」が28.2％、「3．たまに意識する」が56.4％、「4．とても意識する」が15.4％で、平均は2.87（*SD*0.66）であった。この2つの回答について、対応のある平均値の差の検定を行ったところ、有意水準5％における有意差は認められなかった。したがって、世間と社会の意識の程度には差が見られなかったので、これらの各質問について理論的中間点（それぞれ4段階でたずねているので理論的中間点は2.5）と各平均値との差を検討した。その結果、「世間」（t (38) = 6.12, p<.01）、および、「社会」（t (38) = 3.54, p<.01）を意識する程度の平均値は、いずれにおいても、理論的中間点よりも有意に高いことが明らかとなった。

2　「世間」と「社会」に含まれる人物カテゴリー

(1)　人物カテゴリー

多重回答形式でたずねた「世間」と「社会」に含まれる人物カテゴリーの肯定率を整理したものが表1である。表1をみると、「職場の後輩」「大学内の友人」「近所の子ども」「サークルの友人」「幼なじみ」「親」「恋人・配偶者」「兄弟姉妹」について、「世間」よりも「社会」に含まれるという回答が多かった

(2)　人物カテゴリー数の比較

「世間」と「社会」に含まれると評定された人物カテゴリーについて、「その他」と「あてはまるものがない」を除き、肯定されたカテゴリーの数を算出した。その結果、「世間」の平均カテゴリー数が12.82（*SD*7.09）、「社会」の含まれる平均カテゴリー数が15.59（*SD*8.09）

表1　「世間」と「社会」に含まれる人物カテゴリー

		世間		社会		検定
		度数	%	度数	%	
M	近所の知人	29	74.4%	29	74.4%	
W	まったく見知らぬ人	33	84.6%	25	64.1%	
P	職場の上司	26	66.7%	30	76.9%	
T	家族の知り合い	28	71.8%	28	71.8%	
L	近所の同世代の人	26	66.7%	29	74.4%	
Q	職場の先輩	26	66.7%	29	74.4%	
K	近所の年長者	27	69.2%	27	69.2%	
U	友人の知り合い	27	69.2%	26	66.7%	
O	近所の見知らぬ人	24	61.5%	28	71.8%	
R	職場の同輩	23	59.0%	29	74.4%	
D	大学の先生	23	59.0%	28	71.8%	
V	職場の取引先の人	24	61.5%	27	69.2%	
S	職場の後輩	21	53.8%	29	74.4%	**
H	同じ大学の人	22	56.4%	27	69.2%	
I	学校外の友人	21	53.8%	27	69.2%	
E	大学内の友人	17	43.6%	27	69.2%	**
G	同じサークルの人	18	46.2%	26	66.7%	
N	近所の子ども	16	41.0%	26	66.7%	**
F	サークルの友人	15	38.5%	24	61.5%	*
X	異性	20	51.3%	15	38.5%	
J	幼なじみ	12	30.8%	22	56.4%	*
A	親	9	23.1%	18	46.2%	*
C	恋人・配偶者	7	17.9%	17	43.6%	**
B	兄弟姉妹	6	15.4%	15	38.5%	*
Y	その他	2	5.1%	5	12.8%	
Z	上記の中にいない	0	0.0%	0	0.0%	

注：*p<.05, **　p<.01　McNemar 検定による

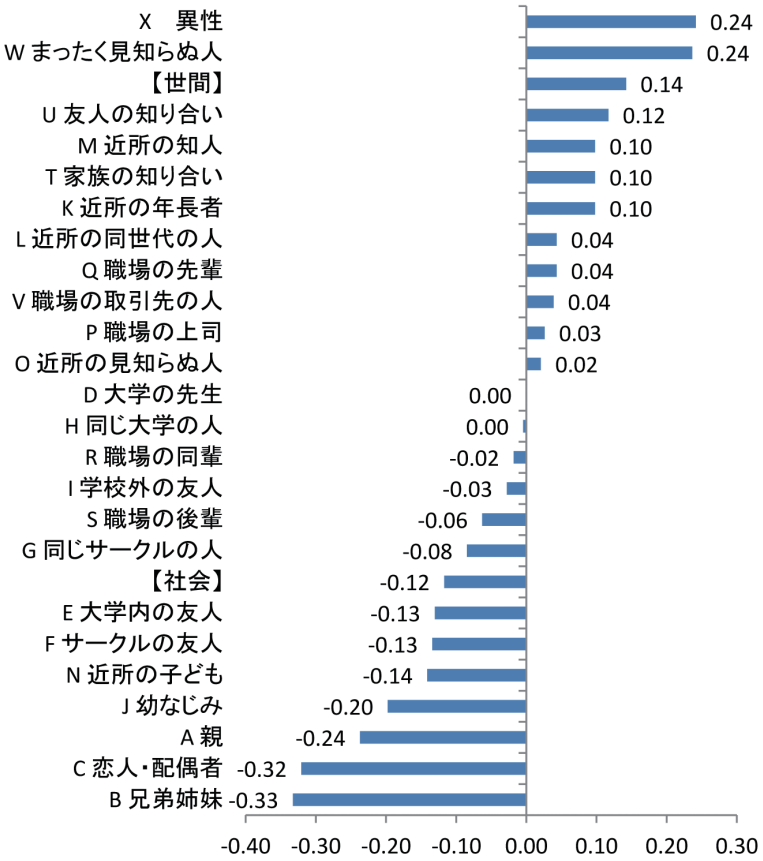

図１ 「世間」と「社会」の人物カテゴリーに対する双対尺度法による分析結果
（表中の数値は相関比により重みづけされた最適重みベクトルである）

であった。対応のある２群の平均値の差の検定を行ったところ、有意水準５％で有意差がみられた（t (38) ＝2.51, p<.05）。

⑶ 「世間」と「社会」に含まれる人物カテゴリーの特徴

「世間」と「社会」に含まれる人物カテゴリーの特徴を分析するために、表１のデータに対してクロス集計表に基づく数量化理論第Ⅲ類によって分析を行った。その結果を図１に示す（相関比0.13）。図１をみると、「世間」とスコアが類似していたカテゴリーは、「異性」「まったく見知らぬ人」「友人の知り合い」などであり、直接接触のない（あるいは、少ない）漠然とした属性の人物であると解釈された。他方、「社会」とスコアが類似していたカテゴリーは、「サークルの友人」「大学内の友人」「同じサークルの人」「職場の後輩」などであり、回答者自身の所属集団に関連する人物であると解釈された。また、「世間」と「社会」をスコアの推移から対比的に解釈すれば、「世間」は直接的な接触がないが存在を認識している人物カテゴリーであるのに対し、「社会」は直接的な接触があり、親密な関係のカテゴリーが多いと解釈された。

３ 「世間」と「社会」に含まれる人物の職業

⑴ 職業カテゴリー

多重回答形式でたずねた「世間」と「社会」に含まれる人物に関する職業カテゴリーの肯定率を整理したものが表２である。表２をみると、「医師」「看護師」「警察官」「裁判官・弁護士」「教師」「大企業の社長」といった職業威信あるいは社会的地位の高い職業カテゴリーと、「守衛・ビルの管理人」「ウェイター／ウェイトレス」「郵便配達の人」「プログラマーや情報処理技術者」といった回答者が日常的に接触しうる職業カ

表２　「世間」と「社会」に含まれる人物に関する職業カテゴリー

		世間		社会		検定
		度数	%	度数	%	
B	役所・役場の人	30	76.9%	31	79.5%	
D	議員	27	69.2%	33	84.6%	
J	教師	26	66.7%	34	87.2%	*
A	町内会・自治会の役員	30	76.9%	29	74.4%	
C	中央官庁の人	27	69.2%	32	82.1%	
E	ジャーナリスト	25	64.1%	31	79.5%	
K	医師	22	56.4%	33	84.6%	**
O	裁判官・弁護士	23	59.0%	32	82.1%	*
G	小売店主	26	66.7%	28	71.8%	
L	看護師	21	53.8%	33	84.6%	**
M	警察官	20	51.3%	34	87.2%	**
P	大企業の社長	23	59.0%	31	79.5%	*
H	ウェイター／ウェイトレス	22	56.4%	31	79.5%	*
N	郵便配達の人	22	56.4%	31	79.5%	*
I	守衛・ビルの管理人	19	48.7%	30	76.9%	**
F	プログラマーや情報処理技術者	19	48.7%	28	71.8%	*
Q	その他	4	10.3%	11	28.2%	**
R	上記の中にいない	1	2.6%	1	2.6%	

注：$^{*}p<.05$, ** $p<.01$　McNemar 検定による

テゴリーとにおいて、「世間」より「社会」が高く評定されていた。

⑵　職業カテゴリー数の比較

「世間」と「社会」に含まれる人物に関する職業カテゴリーについて、「その他」と「あてはまるものがない」を除き、肯定されたカテゴリーの数を算出した。その結果、「世間」の平均カテゴリー数が9.79（SD＝5.69）、「社会」の含まれる平均カテゴリー数が12.85（SD＝5.28）であった。対応のある２群の平均値の差の検定を行ったところ、有意水準５％で有意差がみられた（t (38)＝3.39, $p<.01$）。

⑶　「世間」と「社会」に含まれる人物の職業カテゴリーの特徴

「世間」と「社会」に含まれる人物の職業カテゴリーの特徴を分析するために、表２のデータに対してクロス集計表に基づく数量化理論第Ⅲ類によって分析を行った。その結果を図２に示す（相関比0.08）。図２をみると、「世間」と類似したスコアを示すカテゴリーは、「小売店主」「役所・役場の人」「中央官庁の人」「議員」などであり、「社会」と類似したスコアを示すカテゴリーは、「医師」「看護師」などの専門職や、「プログラマーや情報処理技能者」「守衛・ビルの管理人」などであった。「世間」と「社会」を対比的に解釈すれば、「世間」が回答者の生活の中で接触することもあるがメディア等を介して情報を得る職業カテゴリーを多く含むのに対し、「社会」は回答者が必要になったときに直接的に助力を求める専門職に関するカテゴリーが多いと解釈された。

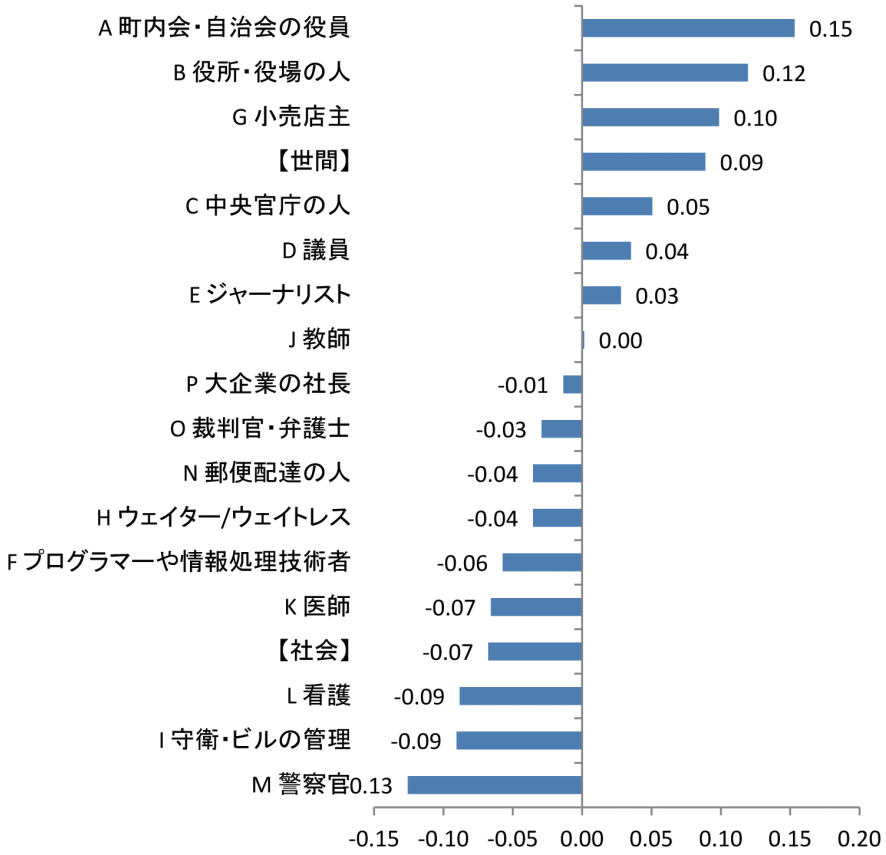

図２　「世間」と「社会」に含まれる人物の職業カテゴリーに対する双対尺度法による分析結果
（表中の数値は相関比により重みづけされた最適重みベクトルである）

４　「世間」と「社会」に関する認識の質的分析

これまでは、簡単な調査票によって得られた量的なデータに基づいて分析を行ってきたが、ここからは、回答者の自由記述内容から、大学生の「世間」および「社会」に対する認識を探索していくこととする。分析対象としては、「世間」という言葉から連想する内容、「世間」を意識するとき、「社会」という言葉から連想する内容、「社会」を意識するときに関する質問である。分析にあたっては、質的データを量的に分析するためのテキストマイニングソフトである KH Coder（樋口，2004）を用いた。

回答者１人あたり４つの自由記述内容（世間からの連想、世間を意識するとき、社会からの連想、社会を意識するとき）があるが、それぞれを１サンプルとして分析を行った。そのため、分析の単位は、回答者数×４だけとなる。そのデータについて KH Coder を用いて、前処理を行った。その前処理の結果として抽出された語の一覧を表３に示す。表３をみると、世間や社会という語につづいて、「自分」「人」「ニュース」「一般」などの名詞や、「考える」「見る」などの動詞の出現数が多かった。

表 3　分析対象の自由記述内容から抽出された語の一覧

抽出語	品詞	出現数	抽出語	品詞	出現数	抽出語	品詞	出現数
する	動詞Ｂ	43	世界	名詞	6	働く	動詞	4
世間	名詞	27	政治	名詞	6	浮かぶ	動詞	4
社会	名詞	25	知る	動詞	6	すべて	副詞可能	3
自分	名詞	20	日本	地名	6	つながり	名詞Ｂ	3
ない	否定助動詞	19	服装	名詞	6	システム	名詞	3
人	名詞Ｃ	19	話	サ変名詞	6	違う	動詞	3
考える	動詞	14	ある	動詞Ｂ	5	会社	名詞	3
ニュース	名詞	12	イメージ	サ変名詞	5	活動	サ変名詞	3
見る	動詞	12	家	名詞Ｃ	5	感じ	名詞	3
一般	名詞	11	外	名詞Ｃ	5	基準	名詞	3
世の中	名詞	11	思う	動詞	5	気	名詞Ｃ	3
世間体	名詞	11	周り	名詞	5	鬼	名詞Ｃ	3
いる	動詞Ｂ	9	集団	名詞	5	決める	動詞	3
活	名詞Ｃ	9	生活	サ変名詞	5	言葉	名詞	3
就	未知語	9	流行	サ変名詞	5	行動	サ変名詞	3
就職	サ変名詞	9	いう	動詞Ｂ	4	授業	サ変名詞	3
生きる	動詞	9	学校	名詞	4	住民	名詞	3
目	名詞Ｃ	9	規範	名詞	4	出る	動詞	3
社会	組織名	8	決まる	動詞	4	場所	名詞	3
人々	名詞	8	乗る	動詞	4	他人	名詞	3
常識	名詞	7	進学	サ変名詞	4	大きい	形容詞	3
アルバイト	サ変名詞	6	人間	名詞	4	渡る	動詞	3
意識	サ変名詞	6	大学	名詞	4	問題	ナイ形容	3
新聞	名詞	6	電車	名詞	4			

注：出現数が 2 以下の語についての記載は省略する。

表４ 「世間」および「社会」を特徴づける語（上位10位まで）

世間						社会					
順位	抽出語	品詞	全体	共起	Jaccard	順位	抽出語	品詞	全体	共起	Jaccard
1	世間	名詞	25（0.160）	20（0.256）	0.24	1	社会	名詞	17（0.109）	12（0.154）	0.14
2	世間体	名詞	10（0.064）	10（0.128）	0.13	2	人	名詞C	17（0.109）	9（0.115）	0.10
3	世の中	名詞	11（0.071）	10（0.128）	0.13	3	生きる	動詞	9（0.058）	8（0.103）	0.10
4	一般	名詞	11（0.071）	10（0.128）	0.13	4	考える	動詞	14（0.090）	8（0.103）	0.10
5	自分	名詞	19（0.122）	10（0.128）	0.11	5	日本	地名	6（0.038）	6（0.077）	0.08
6	目	名詞C	9（0.058）	8（0.103）	0.10	6	就職	サ変名詞	9（0.058）	6（0.077）	0.07
7	常識	名詞	7（0.045）	7（0.090）	0.09	7	集団	名詞	5（0.032）	5（0.064）	0.06
8	社会	組織名	8（0.051）	7（0.090）	0.09	8	世界	名詞	6（0.038）	5（0.064）	0.06
9	見る	動詞	11（0.071）	7（0.090）	0.09	9	活	名詞C	9（0.058）	5（0.064）	0.06
10	話	サ変名詞	6（0.038）	5（0.064）	0.06	10	就	未知語	9（0.058）	5（0.064）	0.06
10	服装	名詞	6（0.038）	5（0.064）	0.06	11	生活	サ変名詞	4（0.026）	4（0.051）	0.05

注：出現数が２以下の語についての記載は省略する。

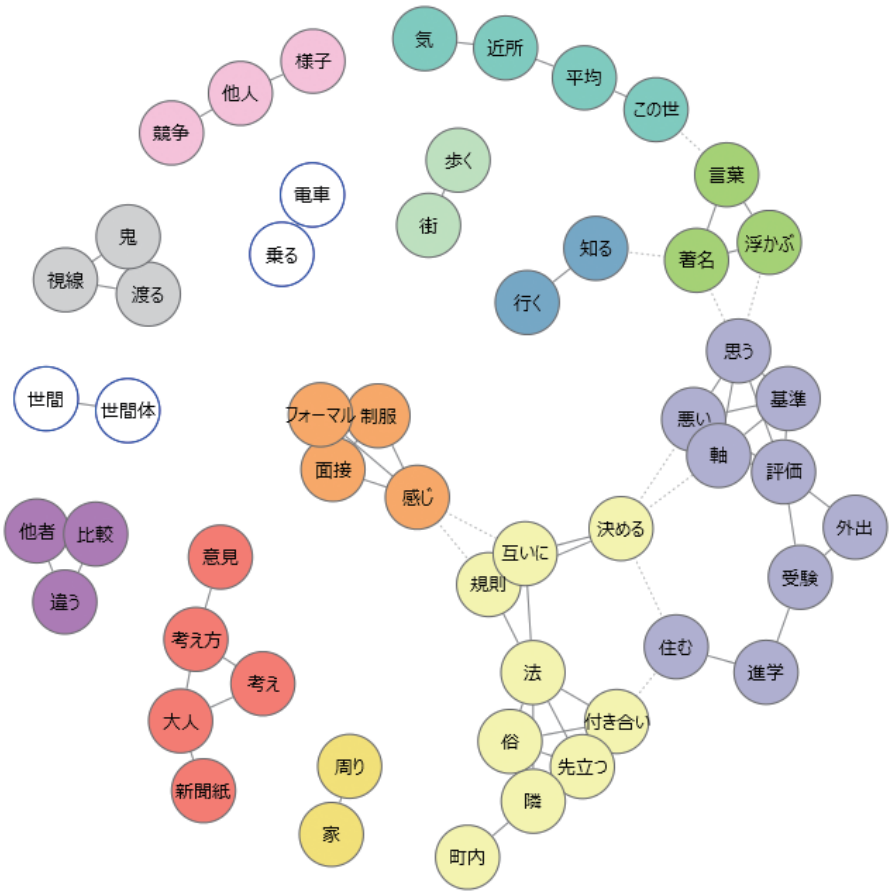

図３ 「世間」に関する抽出語間の共起ネットワーク

次に、このサンプルが、世間について回答されたものか、社会について回答されたものかによって、それぞれを特徴づける語に異同があるか否かを分析するために、特徴語の一覧表を作成し、共起性と Jaccard の類似性測度を算出した（表４）。表４をみると、「世間」を特徴づける語は、世間体や世の中などの記載に加え、一般、自分、目、常識などの語によって特徴づけられていた。他方、「社会」を特徴づける語は、人、生きる、考えるなどの語に加え、日本、就職、集団、生活などの語によって特徴づけられていた。

さらに、この共起性に基づいて、「世間」と「社会」それぞれについて、共起の程度が強い語を線で結んだ共起ネットワーク図を作成した（図３、図４）。なお、この共起ネットワークは、線で結んでいるものの間に共起性が強いことを意味するものであり、配置に関して特に意味があるものではない。

図３をみると、「世間」に関しては、右下から右上にかけて基準、評価、平均などの語を含んだ評価基準や参照基準に関する語が布置され、右下には近隣関係に関する語群が、それぞれ布置されていた。また、中央部には社会規範や通則に関する内容が、左側から左上にかけては、他者の視線や競争などの社会的比較に関する内容が、それぞれ布置されていた。さらに、中央下部には、大人一般の考え方に関する内容が布置されていた。これらの結果から、「世間」と関連の強い語は、評価基準や参照基準となる語と、社会規範や社会的比較に関する語と、近隣関係や大人一般の考え方に関する語であると整理された。

図４をみると、「社会」に関しては、左下にシステムや権力や国などの権限を有し個人の自由を制限するシ

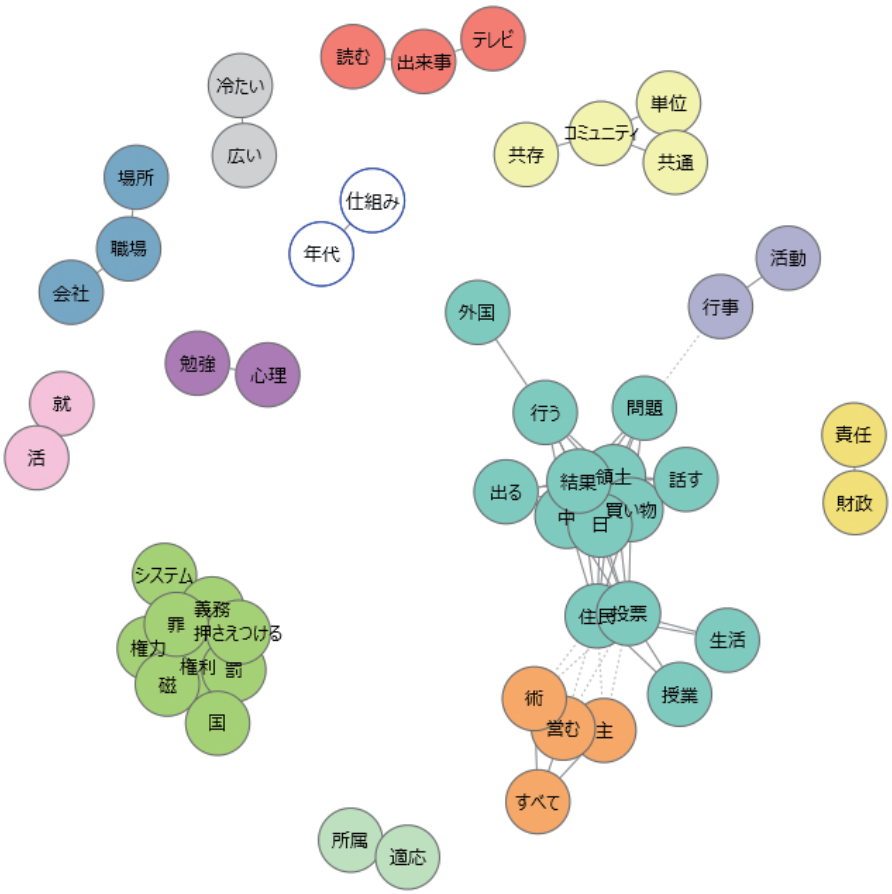

図４　「社会」に関する抽出語間の共起ネットワーク

ステムに関する語が布置されていた。また、図中の各所に、職場、就職活動、所属・適応などの回答者が所属すると予想される集団を意識した語群がそれぞれ布置されていた。中央から右側にかけては、生活を営む空間や単位、場所に関する語群の集まりが複数布置されていた。これらの結果から、「社会」と関連の強い語は、個人が生活する空間の中で、個人の自由を制限するシステムや、回答者がこれから所属する集団に関する語であると整理された。

考　察

本研究では、大学生の少数の調査対象に対する調査をもとに、大学生の「世間」と「社会」についての捉え方を探索的に分析した。量的データによって「世間」と「社会」の回答を比較すると、第１に、回答した大学生が、「世間」と「社会」のいずれも意識しているということが明らかとなった。したがって、従来の若者論において「大学生が『世間』を意識していない」という言説は否定され、何らかの別な機序によって若者論で取り上げられている現象や行動が生じていると考えるのが妥当である。第２に、「世間」より「社会」のほうが含まれると認識された人物カテゴリーや職業カテゴリーのバリエーションが大きいことが明らかとなった。この結果は、「社会」のほうが「世間」より広範な人物を含んでいると回答者に捉えられていることを意味している。換言すれば、「世間」はある一定の範囲内の人々を指す語として捉えられていると考えられる。

こうした「世間」と「社会」に含まれた内容について、量的データと質的データの分析とをあわせて結果を解釈していくこととする。「世間」には、量的データの分析結果によれば、直接的な接触のない人物カテゴリーが多く、直接的な接触よりはメディア等を介して情報を得る職業カテゴリーを多く含んでいると整理された。質的データの分析によれば、「世間」は、評価基準や参照基準、社会規範や社会的比較、近隣関係や大人一般、すなわち、社会的影響過程を表象していた。「世間」認識については、量的・質的な知見でほぼ一貫した知見が得られており、「世間」とは、直接的な接触は少ないが、回答者が人としての存在を知覚していて、そのことによって回答者が社会的影響を受ける人々の集合と整理される。

他方、「社会」には、量的データの分析結果によれば、直接的な接触があり、親密な関係を含む人物カテゴリーが多く、回答者が日常的あるいは必要になった際に直接的に助力を求める専門職カテゴリーを多く含んでいると整理された。質的データの分析によれば、「社会」は、個人の生活空間で、個人の自由を制限するシステムや、回答者がこれから所属する集団に関する語を表象していた。「社会」認識については、量的データと質的データでやや結果に相違が見られたが、世間に比して、個人の自由を制限するシステムと、直接接触することが多い具体的な対象で、社会化機能を有している人々の集合をあわせたものと整理される。

本研究で得られた知見を「世間」に関する先行研究と照合すると、本研究で得られた「世間」の捉えられ方は、井上（2007）のミウチでもタニンでもない中間体としての「セケン」という論考と整合した結果であると考えられる。また、阿部（2005）は「社会」を抽象的なものと捉えていたが、本研究の知見を踏まえれば、含まれる人や職業のカテゴリーが広い概念と捉えることが適切である可能性が見出された。さらに、「世間」から個人が社会的影響を受けているという点については、中村（2011）のモデル中の「世間」と「私」の心理的交流の一部に相当する可能性が考えられる。ただし、「社会」にも個人を規制するという内容が含まれていたため、今後、「世間」独自の社会心理的機能や意味については、実証的な検討の積み重ねが必要となると考えられる。

本研究の意義は、量的把握と質的把握を同時に行うことを通して、従来、理論的、あるいは、概念的にのみ考察されてきた「世間」と「社会」の内容や機能に迫ろうと試みた点である。また、菅原（2005）が指摘した大学生の世間認識の基準について、サンプルは少数であったが、実証的に基礎資料を提示することができたと考えられる。

本研究の限界として、第１に、少数の調査対象者を対象とした分析であるため、この結果を一般化することはできない点が挙げられる。この点については、本研究の知見をもとに、多数の青年に対する研究や、さまざまな年代層を対象とした研究が必要といえる。また、第２の限界として、質的研究の分析方法が、やや雑であり、複合語等について十分検討できていない点がある。この点については、試行錯誤を繰り返しながら質的データの数量的分析手法のスキルアップや解釈を深化させていくことが課題となるであろう。

引用文献

阿部謹也（1995）．世間とは何か　講談社現代新書

樋口耕一（2004）．テキスト型データの計量的分析―２つのアプローチの峻別と統合―　理論と方法，**19**，101-115.

池田謙一・小林哲郎（2007）．ネットワーク多様性と政治参加・政治的寛容性　池田謙一（編著）政治のリアリティと社会心理：平成小泉政治のダイナミクス　木鐸社　pp.167-199.

井上忠司（2007）.「世間体」の構造―社会心理史への試み　講談社学術文庫
Lin, N., Fu, Y., & Hsung, R. (2001). The position generator: Measurement techniques for investigations of social capital. In Lin, N., Karen, C., & Ronald, S. B. (Eds) *Social Capital: Theory and Research*. NY: Aldine de Gruyter, pp.57-81.
町沢静夫（2002）. 学校、生徒、教師のための心の健康ひろば　駿河台出版社
中村陽吉（2011）. 世間心理学ことはじめ　東京大学出版会
新村出 編（2008）. 広辞苑　第六版　岩波書店
菅原健介（2005）. 羞恥心はどこへ消えた？　光文社新書

＊本研究は、世間心理学研究会におけるメンバーとの議論に着想を得て、その一環として実施されたものである。中村陽吉先生・押見輝男先生・外山みどり先生をはじめとする同研究会メンバーの先生方に深く感謝申し上げます。